

## アンサンブルの学習視点を広げるために

音楽教育講座・木村 勢津

### 1 授業の目的

言葉と音楽の関係について見識を広め、自らが楽曲における両者の関係を分析できる能力を養い、芸術的歌唱やそれを支えるピアノ伴奏の実践力養うことを目的とした。

### 2 到達目標と授業の概要

本授業は、音楽文化コース4年生を対象とする授業で、声楽専攻生4年生2名、ピアノ専攻生3名、および2年生の聴講3名（うち1名はピアノ実習を伴う）、ならびに研究生(留学生)1名の参加で行われた。

本授業では、「歌唱研究③」及び「歌唱研究演習③」の授業の発展として、オペラの重唱曲を題材として授業を行った。授業の到達目標に関しては、受講生の専門領域の構成に鑑みて、シラバスに掲載した内容を一部を変更したが、初回の授業オリエンテーションで受講生の周知し承認を得た。

<到達目標>

- 1) 言葉自体が有するリズム・抑揚・語感と音楽の様々な要素との関連を考え、音楽の様式に沿って、的確に歌唱表現できる。
- 2) 台本について、自らが対訳を行い、十分に把握して演奏を行う。
- 3) 本来オーケストラで奏される部分をピアノで演奏することについて、多角的視座から熟考し、演奏に反映する。
- 4) 作品の意図を把握し、グループ活動を通じて、意見の交換を行い、アンサンブルの基本を学ぶ。

授業は、歌唱教材別にグループを2班に分け、各グループに2名のピアノ伴奏者を配して、実習を中心に授業を展開した。選曲に際しての配慮は以下の点である。

- ① 受講生の声種構成
- ② 過去の歌唱研究および歌唱研究演習の授業で体験できていない異性構成の重唱曲
- ③ 時代や様式の違いを比較できる。

- ④ 学生の語学力の範囲で対訳を行うことができる。
- ⑤ 総譜や音源があり、オーケストラパートを確認できる。

楽曲名と役柄および声種は以下のとおりである。

#### 1) G.Rossini

Dall'Opera "La Cambiale di matrimonio"

Terzetto: Quell'amabile visino

Fanny, Edoardo, Slook (S.T. B com)

#### 2) P.Mascagni

Dall'Opera "Lodoletta"

Atto I Scena: Perchè? perchè piagi così?

Atto II Finale: Nessuno! Respiro!

Lodoletta, Flammen (S.T)

Dall'Opera "Il Matorimonio segreto"

授業全体の展開は、選択曲のプレゼンテーションを冒頭に配し、全15回の前期では、ディクシオン演習、楽曲の解釈、各役柄のキャラクターと歌唱法、ピアノと歌の関係を中心に演習を行い、中期では、ゲストティーチャー(GT)を2度招き、オペラの伴奏について、歌い手と伴奏の関係について、考察する時間を設定した。具体的指導として、第1回目は、オペラの伴奏における留意点や練習方法についての講義および演習を実施し、次回まで課題を具体的に設定した。第2回目は、課題についての指導とコレペティトウアーの概説を行った。後期の授業では、言葉と音楽の関係を再考し、音楽表現についてグループ毎に理解を深めると共に、ピアノの果たす役割について、歌手の立場からの理解を深める授業展開に努めた。最終授業は、演奏試験と試験のVTRを観て、客観的に演奏を振り返り、ディスカッションを行い授業を終えた。

### 3 授業の工夫点

#### 1) プレゼンテーションの実施

グループ毎に、選曲した楽曲のプレゼンテーションを行い、楽曲への理解を深め、学習目標設定と意義を認識させた。

## 2) TA の登用

声楽専攻の受講生は、ソプラノ 2 名と研究生のバリトン 1 名であるため、選曲の幅が狭くなることに配慮し、さらに 3 重唱の体験の機会を与える為に TA を登用した。

## 3) GT の招聘

専門的見地からコレペティトゥアーとして地元で活躍している方をピアニストを GT に招聘し、楽譜の読み方やピアノの奏法についてオーケストラの楽曲をピアノで演奏する場合を中心に講義と実習指導を 2 時間行った。

## 4 アンケート結果

第 15 回目の授業終了時に、研究生を除く受講生および聴講生（8 名）を対象に無記名で 4 段階評価と自由記述の併用によるアンケートを実施した。結果は以下のとおりである。

### (1) 授業時間外学習 (①積極的～④消極的)

① 12.5% ② 87.5% ③ 0% ④ 0%

### (2) 担当教員の説明 (①解り易い～④解らない)

① 100% ② 0% ③ 0% ④ 0%

### (3) 質問/意見の発表機会 (①満足～④不満足)

① 87.5% ② 12.5% ③ 0% ④ 0%

### (4) TA の登用 (①有効～④有効でない)

① 87.5% ② 12.5% ③ 0% ④ 0%

### (5) GT の登用 (①有効～④有効でない)

① 100% ② 0% ③ 0% ④ 0%

### (6) 授業レベル (①適切～④適切でない)

① 75% ② 25% ③ 0% ④ 0%

### (7) 専門領域との関連 (①有効～④有効でない)

① 87.5% ② 12.5% ③ 0% ④ 0%

### (8) TA についての意見・感想

曲の内容が充実し、普段できない楽曲を体験できた。授業時間外の練習方法についてのアドバイスを役に立ったことなどが挙げられている反面。事前学習時間の設定が、4 年生中心であるべきであるが、TA の予定を加味して行われることについて、不満が挙げられている。更に TA への負担が大きく感じられるので、複数にすべきであるとの意見も寄せられた。

### (9) GT についての意見・感想

ピアノの独奏と伴奏の違い、オーケストラで演奏する楽曲をピアノで演奏する場合の演奏法を学べた。コレペティトゥアーの立場から声楽の学習方法を学べたとの意見が出された。また、少ない時間で多くを学ぶために、事前に予習の焦点を決めて受講すべきであったとの受講生の立場からの反省も記述されていた。

### (10) その他の自由記述

歌詞のとらえ方やオケパートの弾き方が徐々に理解できるようになったこと。1 曲に対して伴奏者を 2 名配したことで、教師の説明や指導が客観的に理解できたことなどが挙げられた。また、履修している他の授業では学べなかった演奏の心得を知ることができたと評したものもあった。一方、「歌唱研究」なので、歌に重点が置かれているのはやむを得ないが、ピアノの指導も充実して欲しいとの要望もあった。

## 5 今後の課題

歌唱はその殆どが伴奏を伴う形態を取っているが、授業者は、本学の学生の傾向として、声楽専攻生は、自らの演奏の熟達度に視点が置かれ、伴奏パートへの着目が薄い傾向にあると感じている。また、ピアニストも歌詞を伴う音楽であるにも拘わらず、テキスト研究の重要性に対する認識が希薄であると感じていた。この授業を通して、互いの役割の重要性について認識を深め、アンサンブルにおける表現力の向上を目指した。

GT の招聘により、独奏としてのピアノでなく、アンサンブルとしてのピアノの学び方については、その方向性を見出した学生もおり、また声楽の専攻生にとっても、違った視点からの助言は有益となったことがアンケートの結果からも解る。しかし、毎回の授業コメントカードからは、学生間の技量や学習意欲の差が読み取れ、個々の目標の設定の差をアンサンブル活動の中で、どのように埋めるか、その支援のあり方が今後の課題となった。

本授業は、同授業名での開催は、本年が最終年となったが、今後授業名を変更して、開講される「声楽実習」に受け継ぎたい。